

ブック・ガイド

<出産>への権力統制問題

――若林敏子『中国 人口超大国のゆくえ』（岩波新書、1994年4月、221頁、580円）

成蹊大学 安原茂

中国政府が今日推進している、いわゆる「一人っ子政策」は、地球規模における人口問題との関連において、社会主義的人口政策との関連において、また、夫と妻による<出産権>との関連において、さまざまな議論をよんでいる。社会学者であり人口学者である著者は、かねてから中国人口問題に深い関心をよせ、文献研究を重ねる（その成果は『ドキュメント・中国の人口管理』など）とともに、何回もの現地観察・資料収集につとめてきた。そこに蓄積された認識を基礎にしつつ、それを媒介として今日人類史的レベルの人口問題への認識視点をも展開しているのが、本書の特色である。

標題のように、本書の中心部分は中国における一人っ子政策の展開をめぐる問題であって、この人類史上きわめて珍しい政策の展開過程の叙述と、著者によるさまざまな諸地域における事例の収集、観察の記述は、読者に関連情報の提供と、それに関連したさまざまな理論的刺激を十分に与えてくれる。<一人っ子>政策のきびしい実施状況は本書によってきわめてリアルに紹介されているといえよう。「計画出産率報箱」（83頁）のことなど、私ははじめて知った。人口の国内・国際移動の記述も興味ある問題を教示している。

総じて本書はアジアの人口問題と人口政策（インドなどをふくむ）へのすぐれた問題提起的著作であるが、またいくつかの疑問もないわけではない。たとえば、人口学者 馬寅初をめぐる周恩来との関係はたしかに感動的ドラマであるが、では著者はマルサスの<人口法則論>を全く否定するのであるか。馬寅初批判は、毛沢東よりもマルクスに拠るものであったろう。また、<離土不離郷>の小城鎮建設は多数の農村過剰人口を農民工として吸収するものであったが、その将来は農業従事者の高齢化、女性化に帰結するものであった、というような問題にはふれていない。こうしたことはまさに<望蜀>というべきであろうが、今後の研究成果を期待したい。